

学生による評価が学生の発表への意識及び実際の発表に及ぼす影響

—中国の日本語専攻出身の大学院生を対象に—

朱 桂榮

1. はじめに

中国の大学院教育においては、学生の研究能力の育成が重要な課題である。特に近年、募集規模の拡大とともに、学生数が急増している。大学院教育の質が問われる中で、学生の研究能力の育成が一層緊急な課題となっている。外国語専攻出身の大学院生は、学部段階において模倣、暗唱、再生の学習方法を多用したため、大学院に入学した後、自主的・協働的な研究態度が欠如していることが少なくない。

砂川・朱(2008)においては、日本語専攻出身の中国人大学院生を対象とするジグソー学習法を取り入れた授業に関する実践報告がなされた。実践の結果、大多数の学生は学術的コミュニケーション技能の獲得や研究に対する自己認識の高まりに達成感を得、「独習型」から「協働型」へ、「受身型」から「自主型」への意識の芽生えが確認できたという。

さらに、朱・砂川(投稿中)では、ジグソー学習法による活動への参加をどのように受け止めているのか、またジグソー学習法の体験を通して、学生は大学院での普段の授業活動への参加をどのように捉え直しているのかをインタビューデータに基づいて分析した。ここでは、発表をする・発表を聴くという活動の分析結果について紹介する。聴き手と発表者の情報差を持たせることで学生の参加動機を高めたと同時に、分かりにくい発表を聴いた時のつらさを学生に実感させることができた。発表を聴く時の困難さについて、「自分のグループの発表を聴いたときは問題がなかったが、他のグループの発表を聴いた時は情報量が多く分からないところがたくさんあってつらかった」、「発表者が具体的な例文を挙げてくれなかったため、(聞いた内容が)全然頭に入らなかった」など、発表が理解できないことを訴えた学生が多かった。このような体験を通して、学生が分かりやすい発表の重要性について気づくことができた。また、普段の発表においては、自分たちは

発表者として発表に対する動機が低く、聴き手に配慮していなかったことや、聴き手として発表を聴く動機が低く、受身的な参加になりがちで、発表を聴く集中度が高くないと問題点も捉え直している。

上の結果から、学生の発表能力の不十分さを示していると言える。発表をする、発表を聴くという活動を順調にさせるには、学生の発表能力を向上させるのが緊急かつ重要な課題であると思われる。そこで、筆者は学生の発表への意識及び発表能力の向上を目指すために、学生による評価活動を授業に取り入れた。本稿では、学生による評価活動が学生の発表への意識及び実際の発表に及ぼす影響を検討する。

2. 授業の実施概要

2.1 授業の狙い

本授業において、学生の発表への意識と発表能力の向上を目指している。具体的な方策として、発表に対し、学生による評価活動を取り入れることにした。その理由は以下の三つ挙げられる。一つ目は、これまでの学生の発表は終わったら終わり、ふり返る機会が少なかった。二つ目は、発表を評価することによって発表そのものを対象化できる。よって、発表に対するメタ認知を形成しやすくなる。意識化における評価の重要性について、多くの研究結果によって既に指摘されている(横溝 2000、池田他 2002、川村 2005 など)。三つ目は、評価すること、評価されることは参加者の参加動機を高めることができると考えられる。評価する側は責任感を持たなければならない、評価される側は発表に臨む意気込みも高くなると考えられる。

2.2 授業の概要

授業名: 「日本語教育基礎研究 I」

期間: 2007年3月初め～4月末

回数: 9回 (1回100分)

受講者数: 修士課程16名 (他機関聴講者4名)

授業担当者：筆者

教材：『日本語教育における学習の分析とデザイン』（岡崎眸・岡崎敏雄著 2001, 凡人社）

2.3 一回の授業の流れ

一回分の授業の内容と流れを表1に示す。

表1 一回分の授業の内容と流れ

	活動の種類	授業内容	時間	使用言語
授業中	発表 (固定メンバー4人)	・教科書の内容を発表する ・関連内容を調査して発表する	50分	日本語
	グループ討論 (自由メンバー4人)	・発表内容・発表についての口頭評価	25分	母語
	全体討論	・グループ討論の内容を共有する	10分	
	質疑応答	・発表者と教師が質問を受ける	15分	
授業後	ふり返り	・発表者への評価、または発表としての自己評価 ・その他の気づき		母語 (回覧)

表1に示すように、発表は毎回4人の固定メンバーで行われる。教科書の内容及び調べた関連内容をグループで相談し、みんなの前で発表する。発表が終わった後、グループ討論に入る。各グループの発表に対し、内容面だけでなく、発表のやり方などについても意見交換を行う。これらの検討を踏まえ、授業後、ふり返りシートに記入する形で再度自分の考えを整理し、発表者の発表を評価し、または発表者としての自己評価をすることになる。

3. 研究目的と分析方法

本稿では、学生による評価は発表への意識及び実際の発表に及ぼす影響を探ることを目的とする。具体的には以下の二つの研究課題を立てる。

- (1) 評価活動を通して、学生は発表についてどのような気づきを得たのか。
- (2) 評価活動は学生の発表にどのような影響を及ぼしたのか。

本稿では、第2回～第7回の授業を分析する。対象者は聴講生を除いた12名で、Snと呼ぶ。固定メンバーのグループは3つあるので、それぞれG1、G2、G3と呼ぶ。ふり返りシートを分析データとする。分析の方法として、まずふり返りシートを文字化する。それから文字化資料をもとに、発表についての気づきと評価の部分を取り出し、比較法を用いてカテゴリーを生成する。これらの作業を踏まえ、時間軸に沿って、発表に対する気づきの記述から、学生の気づきの様子を捉える。更に、他者評価と自

己評価の記述から、実際の発表の変化を捉える。

4. 分析と考察

4.1 発表についての気づき

ふり返りシートに記入された発表についての気づきは少なくなかった。その内容を分析した結果、「よい発表の要素への気づき」「発表を改善するための提案」「発表に対する積極的な姿勢」という上位三つのカテゴリーが抽出された。第2回目を例として、各カテゴリーと具体的な語りを見てみよう。

【よい発表の要素への気づき】

- ・発表者の言語運用能力が重要だ。(S5)
- ・時間配分が重要である。(S2)
- ・発表者自身の内容理解が大切だ。(S5)
- ・聴き手の反応を見ることが必要だ。(S4)
- ・メンバーの協力が大切だ。(S6)

以上のように、学生はよい発表の要素について、言語運用能力、時間配分、内容理解、聴き手への配慮、メンバーの協力などの気づきを得ている。

【発表を改善するための提案】

- ・難しいところに実例を挙げると理解しやすくなるのではないか。(S3)
- ・自分の理解を発表に入れるといいと思う。(S5)
- ・一人がタイムキーパーになって時間を計るのもいい。(S12)
- ・発表の上手な人に経験を紹介してもらおうといい。(S6)

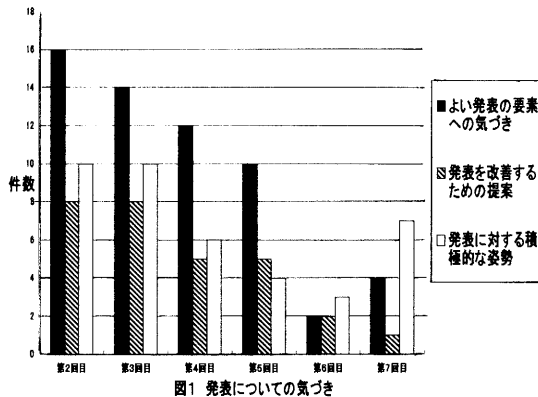
発表を改善するための提案には、聴き手の立場から見えたこと、感じたことを活かしたものが少なくない。このことは、学生たちが聴き手を配慮しながら発表の改善を考えていることを示している。

【発表に対する積極的な姿勢】

- ・われわれは次回の発表のために頑張らなければ。(S2)
- ・われわれは今回の発表のレベルを追いつかなければ。(S11)
- ・他の人を見習って、自分の足りないことを補いたい。(S9)

これらの語りから、学生たちは他の発表者に刺激され、よい発表に臨む意気込みを得た様子を伺うことができる。

このような「発表についての気づき」の6回分の数値からみると、図1のようになる。



全体的に見ると、各回の件数はだんだん減っていくが、第2回目から第5回目まで発表について多くの気づきがあったことが分かる。第6回目から、発表についての気づきが減少したが、ふり返りシートの記述に「今回はみんなの討論の焦点が発表の仕方から発表の内容が変わった。これは喜ばしい変化だと思う (S11)」とあるように、授業中討論の焦点の変化が確認できる。この変化の背後には、評価活動の積み重ねを通し学生が発表に関してある程度自分なりの考えを徐々に形成していることが推測される。一方、第7回から発表に対する積極的な姿勢を示す語りが一気に増えた。まもなくコースが終了するが、学生の発表に対する積極的な態度が減少するのではなく逆に高揚している。このことから学生の発表に対する意識の高まりを伺うことができる。

4.2 実際の発表の変化

本稿では、他者評価と自己評価に見られた記述から発表の変化を捉える。以下、それぞれについて述べる。

4.2.1 他者評価から見た発表の様子

他者評価とは、聴き手が他人の発表についての評価である。他者評価の記述から、連続する発表について、前の発表についての評価が後の発表に影響を及ぼしていることが分かる。ふり返りシートを分析した結果、その影響は、主に以下の三種類となる。

①【肯定→肯定】

定義：前のグループの発表において肯定された点が後のグループの発表でも肯定されたケース。

例：第2回目の発表について他者評価には以下のものがあつた。「S1さんのPPTによる発表の形は視覚的に分かりやすいので参考にすべきだ (S3、S8)」。一方、第3回目の発表について、「今回の

PPTは作りこみがよくて、前回よりもすばらしい (S1、S2、S4、S7、S8)」との評価が多かつた。このように、前のグループの発表について肯定された点が後の発表に活かされる可能性が考えられる。

②【問題指摘→肯定】

定義：前のグループの発表について問題だと指摘された点が後のグループの発表において改善され、その改善が肯定的肯定されたケース。

例：第3回目の発表について、他者評価には以下のものがあつた。「小さな問題ですが、時間管理がよくない (S3、S6、S7、S8、S9)」。しかし、第4回目の発表について、「時間管理にも気をつけた (S4)」との評価が見られた。このことから、前回の発表で指摘された問題が次回の発表者に重視され、改善された結果、評価されたことが分かる。

③【自らの創意工夫】

定義：発表グループの自らの努力により考えた発表に関する工夫。もちろん、その創意工夫が肯定的な評価を得ると、【肯定→肯定】の形で他のグループの発表において活かされることがある。

例：第6回目の発表について、「このグループは従来の発表の形を超え、内容を尊重する上で、発表を聞くだけでなく実際に体験する形で発表形式を考案した (S1、S2、S5、S6、S7、S8)」の記述から、学生たちはよい発表をするために、創造的に考えることが分かる。

このように、以上の三種類の影響を全体的に見ると、表2となる。表2から、前回の発表に対する評価は次回の発表に様々なプラスの影響を及ぼすことが分かる。また、たとえ前回の評価内容と直接関係がなくとも学生たちは創意工夫で様々なアイデアを考案したことが分かる。さらに、それらの創意工夫が肯定的評価を得ることによって、次回の発表に活かされさらに肯定的評価を得たことが観察される。

表2 他者評価から見た発表の様子

	1. 調査資料の充実さ	(第2回目→第3回目)
肯定→肯定	2. PPTの効果的利用	(第3回目→第4回目)
	3. 補足内容の深まり	(第3回目→第4回目)
	4. 聴き手との交流	(第4回目→第5回目)
	1. まとめが不十分 →全体的なまとめ	(第2回目→第3回目)
問題指摘→肯定	2. 協働作業が不十分 →協働作業ができた	(第2回目→第3回目)
	3. 自分の言葉が足りない →分かりやすい説明	(第2回目→第3回目)
	4. 時間管理がよくない →時間管理ができた	(第3回目→第4回目) (第6回目→第7回目)
	自らの創意工夫	1. PPTの効果的利用
2. 聴き手との交流		第4回目
3. 図表の使用		第5回目
4. 体験型の発表デザイン		第6回目

4.2.2 自己評価から見た発表の様子

自己評価とは、発表者が自分たちの発表について評価を行うことである。計6回の発表において、G1、G2、G3はそれぞれ2回行った。三グループの各2回の同一人物による自己評価を比べることにより、発表の様子の変化を捉えることができると考える。ふり返りシートを分析した結果、以下の三つの種類があった。

①【反省→肯定】

定義：初回発表の自己評価における反省点を、再度の発表においてそれを改善し自ら肯定すること。

G1の例：初回発表（全第2回目）の自己評価において、「わがグループはあまり協力しなかった。作業を分けただけで、それぞれのことをやっただけなのだ。最後の確認もなく、他の人が何を書いたか、どんなことを調べたか、どんな内容を補足したか、分からなかった。教材内容を体系的に把握しなかった（S8）」と、協力態勢についての反省が見られた。一方、**G1の再度の発表（全第5回目）**の自己評価において、「今回の準備が大変だった。何度も考えた結果、教科書の内容を理解して、疑問点について調べることにした。しかし、調べた内容が多くて、メンバーのS6さんと相談して、S6さんが示した教科書の全体像に基づいて調査内容を再度調整した。今度、安心して納得できた（S8）」のように、協力態勢について自己肯定と見られる記述があった。このことからG1は、協力態勢という点について進歩したことが推察される。

②【反省→反省】

定義：初回発表の自己評価における反省点を、再度の発表において十分に改善できず引き続き反省すること。

G2の例：初回発表（全第3回目）の自己評価において、「教科書をまとめる時、根拠を調べなかったことを反省する（S1）」などの記述があった。一方、**G2の再度の発表（全第7回目）**についての自己評価には、「自分の考えを述べる時には、慎重な調査をしかつた」（S1）との反省があった。調べて根拠を持つという点については、S1は再度の発表で十分に改善されていないことが示された。今後、発表を重ねることでの改善が期待される。

③【肯定→肯定】

定義：初回発表の自己評価において、肯定した点を再度の発表においてそれを活かし、自ら引き続き肯定すること。

G3の例：初回発表（全第4回目）の自己評価には、「今回の資料調査は十分にできたと思う（S3）」と自ら準備作業を肯定するコメントがあった。そして、**G3の再度の発表（全第6回目）**の自己評価にも「準備段階でのグループ討論はとても面白かった。教材に対する内容理解が深まっただけでなく、どのように発表したらいいかについても討論した。いいアイデアがたくさん出た。このプロセスはとてもよかった。発表する前にもう一回話し合った。レジュメを交換し、発表の変更内容についても情報交換した（S3）」と綿密な準備作業を評価するコメントがあった。2回の自己評価を比べて、G3は準備作業を引き続き努力していることが分かる。

以上のように、各グループは、前回不足した点を次回の発表で改善したり、前回よかった点を次回さらによくしたりするなど進歩の様子を示した。一方、前回不足した点は十分に改善できず再び反省するグループもあった。これは一人一人の学生が自身の課題を克服することの難しさも語っている。発表を重ねることでの改善が期待されるが、ここで大切なのは学生たちが発表をふり返る姿勢とそこで得た気づきだと思われる。

5.まとめと今後の課題

本稿では、ふり返りシートに記述された発表に関する気づきから、学生による評価活動は学生の発表への意識化が促されたことが推察された。また、他者評価と自己評価の記述から、回を重ねるたびに学生の発表が徐々に改善されていくことが推察された。今後の課題として、学生が他人の評価結果をどのように受け止めるのか、その変化のプロセスを追求したい。

参考文献

- 池田玲子・小笠恵美子・杉浦まそみ子(2002)「実習生の内省的実践としての授業評価活動」『世界の日本語教育』12, 95-106.
- 川村千絵(2005)「作文クラスにおけるポートフォリオ評価の実践」『日本語教育』125, 126-135.
- 砂川有里子・朱桂榮(2008)「学術的コミュニケーション能力の向上を目指すジグソー学習法の試み—中国の日本語専攻出身の大学院生を対象に」『日本語教育』138号, 92-101.
- 朱桂榮・砂川有里子(投稿中)「ジグソー学習法を活用した大学院授業における学生の意識変容の要因」
- 横溝紳一郎(2000)「ポートフォリオ評価と日本語教育」『日本語教育』107号, 135-140.